南葵音楽文庫ニュースレター
NANKI MUSIC LIBRARY
Newsletter
南葵文華
2024.12.28
第１１号

音楽図書館１００年

歴史と価値をひらく

南葵文庫は、庫主である徳川頼倫の決断により、関東大震災で図書館を焼失した東京帝国大学へと寄贈された。蔵書と建物は、1924年7月4日をもって東京帝国大学図書館分室となった。その日は、寄贈から除かれた音楽書と楽譜およそ2700冊が頼貞の所管するところとなり、独立した音楽図書館への歩みが始まった日でもあった。

早くも同年10月2日に、頼貞は南葵楽堂図書部を開設。翌11月には帝大図書館分室に含まれなかった南葵文庫事務室部分を用いた一般公開が始まった。翌1925年、父頼倫の逝去と葬儀、襲爵、徳川家の家政再構築といった多事多端のなかでも、理想の音楽図書館へ向けた邁進はつづいた。10月、南葵音楽事業部を設立、附属の南葵音楽図書館を開設し公開した。その年の末には、英文の『カミングス文庫目録』を刊行、配布した。あたかも世界の音楽図書館の中に、南葵の誕生を告知するかのように…。

▲南葵文庫の受け渡し式記念写真と南葵文庫の鍵正面玄関前
(1924年7月4日)
前列中央に徳川頼倫、その右に東京帝国大学総長古在由直、徳川頼貞。
頼倫は、前日まで用いていた文庫の鍵を桐箱に収め保管した。

◀南葵楽堂図書部表札

▲徳川頼貞　1925年

南葵文庫事務所▶
頼貞の所管とされた楽譜・音楽書等は、南葵楽堂図書部の所蔵となり、帝国大学管理とならなかった旧南葵文庫事務所で一般閲覧に供された。

南葵音楽文庫アカデミー 春 より

新宮の軍楽、音楽文庫に新たな視座

新宮市文化複合施設 丹鶴ホール　2階 大会議室

2024年3月2日

3月2日(土)に新宮で開催された南葵音楽文庫アカデミー。最初は**美山良夫氏の「「南葵音楽文庫」100年　今、その扉をひらく」**。前半では頼貞の時代の文庫について、後半では2017年に和歌山県立図書館で公開されて以降の文庫についてお話いただきました。

私の印象に残ったのは前半の「頼貞の時代に」。美山氏は、文庫が成立するにあたり**三つの「脈」**のあったことを指摘されました。

①藩士県人の**人脈**

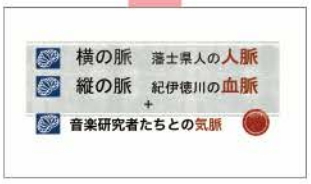
具体的には、鎌田栄吉、小泉信三、上田貞次郎、山東誠三郎、そして喜多村進。

②紀伊徳川の**血脈**

頼貞やその父・頼倫の学問芸術を大切にする姿勢は、「紀伊徳川家＋田安徳川家の血脈」に由来する。

③音楽研究者たちとの**気脈**

田村寛貞、兼常清佐、遠藤宏、辻荘一らが、頼貞の構想に共鳴。



この三つの「脈」の「結節点」として南葵音楽文庫をとらえる、というのが前半のお話の骨子でした。おそらくこの「三つの脈」は文庫にとって必要不可欠であり、そのいずれが最も大切かという議論より、それらがどのように絡まり合い、結びついていたかを見ていくほうが、文庫の理解のためには大切でしょう。

ただ、これらの「脈」は、最初から私たち南葵音楽文庫研究員の視野に入っていたわけではありません。当初は私たちにとって、この文庫は「頼貞個人のコレクション」でしたが、調査研究が進むにつれ、頼貞の意図したものが「音楽図書館」であったこと、文庫の成立と活動にあたっては、頼貞の周囲に優秀なブレーンがいたことなどがわかってきました。その延長線上に、上記の3つの「脈」が見えてきた、というのが実情です。そして、このような視野の広がりは、まさに2017年に和歌山でオープンして以降の文庫の歩みと並行するものだったと言ってよいように思います。

後半は**奥中康人氏の「幕末維新期における新宮と軍楽──スネアドラムの楽譜を中心に」**。新宮に残るスネアドラムの楽譜『鼓譜　第壹篇』を題材としたお話。さまざまな資料を駆使して「新宮におけるスネアドラム演奏の実態」に迫るという内容は、新宮にお住まいの方々には特に面白かったのではないかと思いますが、ここではむしろマクロな視点から、ポイントとなることをひとつふたつ書いてみましょう。

まず、軍楽は軍事技術(ミリタリー・エンジニアリング)の一環であり、西洋音楽はそのようなものとして導入されたということ。兵士たちを行軍させる「軍楽」そのものはもちろん、楽器を作る技術、演奏する技術、演奏および行軍を訓練する技術も、広い意味での軍事技術の一部とみるべきでしょう。この点で「『ジンストマルス』を1曲演奏する間に、兵士たちは415歩、約311m進む計算になる」という奥中氏のお話は、私には特に印象的でした。クラウゼヴィッツの『戦争論』には、天気や道の状態、兵士たちの疲労度などが謂わば「摩擦」を生じ、移動が計算通りにいかないケースを論じた部分がありますが、それも上記のような計算が成り立てばこその話です。

このような軍楽は、音楽が人々の身体運動を同調させ同期させる力を応用したものですが、私はここで泉健先生の「H.ベッセラーの『音楽聴の根本問題』(1925)」(『南葵音楽文庫紀要』第6号)を思い出します。ベッセラーは「芸術作品」として「鑑賞」される「上演的」な音楽とは別に、みんなで一緒に歌ったり踊ったりする「日常的」な音楽のあることを指摘し、後者をより「根源的」であるとしました。この区分によればクラシック音楽は前者ですが、軍楽は後者の「日常的」音楽を、より意識的・方法論的に活用したものと言えるかもしれません。とすれば、頼貞の愛した音楽は軍楽の対極にあることになりそうですが、頼貞自身が『薔庭樂話』の「幼年時代の思い出」で軍楽について語っているのは面白い事実です。

そういえばアルベニス(1860〜1909)もマーラー(1860〜1911)も音楽の原体験は軍楽でした。このことは、ベッセラーの言う「上演的」な音楽と「日常的」な音楽の間に、さまざまな相互作用のありうることを示唆しているように思われます。この点との関連で、軍楽から鼓笛隊が派生していくプロセスについても、機会があれば奥中氏のお話を伺いたいところです。　(近藤秀樹)

◀ラッパを持つ徳川頼貞（3歳の頃）

南葵音楽文庫アカデミー 春 より

南葵音楽文庫の現在～歴史と価値をひらく

和歌山県立図書館（本館） 2階 講義·研修室
2024年3月3日

【第１部】
秘蔵から公表へ　和歌山県寄託までの歩み

①20年前の夏、突然の再会に始まるストーリー

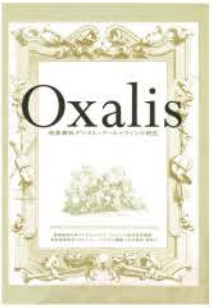
略年表（右記）は、頼貞没後の歩みを示している。2004年夏、関係者の案内で文庫の収蔵先を見学する機会を得た。折から大学が受けた研究助成に音楽資料のデジタル化研究を提案、読響と合意に至った。今に至る道の端緒になった。（美山）

②貴重資料のデジタル化、「南葵楽堂の記憶」コンサート

慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究機構の助教として、プロジェクトを担当、カメラチームとともに収蔵場所に出向き、撮影。一日かけて100画像収録しかできない。

▲カメラによる高精細画像収録
（慶應義塾大学DMC機構/2006）

「デジタルでよみがえる南葵音楽文庫」（慶應DMC作成、2008年）を紹介し上映。「南葵楽堂の記憶」コンサートを2回開催。研究活動年報『Oxalis』を発行、また、マイクロ画像をデジタル化して、機構のサイトで公開した。（篠田）



▲『Oxalis 音楽資料デジタル・アーカイヴィング研究』
（創刊号/2007）

③読売日本交響楽団による４つの英断、貴重資料の修復

デジタル化承認と作業サポートに加え、助成研究の成果公表のため読響も協力し、秘蔵から一変して公開と活用の途を探求した。機構の活動終了後はデジタル化を継承（業務委託）、公益法人改革にともなう公益財団法人化にあたり演奏事業とともに南葵事業を明文化、予算化した。和歌山県に寄託公開後も、貴重資料の修復事業を継続中。（美山）

スキャナーによる高精細画像収録▶
Book Eye III（スキャナー）を使用。
（読売日本交響楽団/2014）

【第２部】
歴史と価値をひらく ―和歌山での７年間―

①私と南葵音楽文庫　和歌山公開７年を顧みて　泉　健

東京藝術大学音楽学部楽理科の学生時代、指導教官から「その専門学術雑誌なら南葵にあるよ」と教えられた。今も当時の入館証が残っている。国立音大に寄託された時期は、遠路閲覧に出かけた。２番目は辻邦生の『樹の声 海の声』（単行本、1982年刊）で、頼貞と同級であった図師尚武の妹（小説中では逗子咲耶）が幸福を追求する語りのなかに、南葵や音楽奨励会、それらを取り巻く社会がタイムマシンにのったかのように描かれている。南葵講座のため新宮に出向き、東くめについて調べるうちに、瀧廉太郎のベルリン住所（短期間しかいなかった）について解明できた。4番目はこの図書館に並んだ音楽学の文献群。東京芸大に楽理科ができたのは1949年。大正時代によくこれほどの専門文献を蒐集と、あらためて感心させられた。

▲辻邦生『樹の声 海の声』
（1982）

②歴史と価値をひらく：研究員による報告と座談

【カミングス文庫】1987年にロンドンでカミングスについて問われて以来の課題。音楽資料コレクターとしてカミングスの全体像はいまも調査中。日本に届いたカミングス旧蔵資料について目録作製、個々の資料の来歴（手沢本、蔵書票含め）、頼貞が入手した経緯の詳細について等の調査研究を進捗できた。今後も継続。（佐々木）

【南葵音楽図書館】閉鎖から90年。組織団体、文化装置、図書館として書かれた文献はいまだに無い。財力を背景にした当主の趣味の延長と誤解された。頼倫は南葵「文庫」。それに対して頼貞は社会的な文化装置としての「図書館」を明確にし、1925-26年に収書方針確立。兼常らの考えを承認。日本の洋楽黎明期にあって、資料私有の「音楽の殿様」ではなく、演奏用研究用に供した公共貢献である点を明らかにした。（林）

【頼貞の人物像刷新】当初は私的収集と思っていたが、読響担当者から目録等関係資料を提示され目を開かれた。コンサートや研究出版活動に強く関与し、有名音楽家や自分の署名資料も私有せず公開、公共財とした。和歌山でより明らかになった諸点をふまえ、頼貞の人物像は見直しが、伝記は書き直す必要があると強く思う。（篠田）

【演奏を通じた郷土資料も】100年前に刊行されたスナール社室内楽シリーズを一括所蔵しており、含まれたジル＝マルシェックス作曲の楽譜は稀少。こうした資料を実際に演奏し（実例紹介）、和歌山に定着、記録を郷土資料として蓄積へ。（近藤）

【和歌山の利点との共創】明治以後の徳川家（茂承、頼倫、頼貞）に関する文献乏しく、研究者もいないのに驚いて7年。無視ないし誤解かとも。和歌山の利点は空間、時間、人間にある。空間：余裕ある収蔵、専用閲覧室。時間：専心できる時間、来和に要する時間距離による。人間：紀州徳川という親近感。その恵みのなかで、はじめて文庫本来の姿が、頼貞の本願と業績が現出してきた。それをより確固たる形に残さねば。（美山）

7年間の活動所感をふまえての展望、課題

カミングスのみならず目録の整備。楽譜目録の作製（OPACでは有無のみ）。地域の人、時間をかけての悉皆調査（書き込み等）。独自資料の演奏とその公共財化。貴重資料に特化した南葵音楽文庫紹介リーフレットの改訂ないし新規追加。南葵音楽図書館の意義と頼貞の人物像を正鵠に伝える文献の作製など。（各研究員）

※2024年3月3日、南葵音楽文庫アカデミーの発言から抄録。当日はこのあとフロアからのコメントがあったが、割愛した。（抄録文責:美山）

閉ざされていた扉をひらくと

100年の歴史の中では非公開の時代が非常に長く、収蔵している資料についての調査研究とその発表は乏しいままでした。広汎な調査はようやく2017年に始まりました。作業はまだ序の口です。とはいえ、「カミングス文庫」を念頭に西洋音楽史からみて貴重な資料を多く含むコレクションとする従来の理解は、今や一面的に過ぎない点が明らかになりました。

開き始めた扉の先に見えてきた景色に、研究員はじめ関係者は驚き、レクチャーや『南葵音楽文庫紀要』（以下『紀要』）等で報告、また資料展示を行ってきました。

知られざるコレクションに光

まったく知られなかった、かろうじて名前だけは、といったコレクションを見いだし、報告や目録を作りました。1920年代パリの祝祭的日々のなかで、噴火するように楽譜を出し短期間で消えていったスナール社。その室内楽シリーズが、発行時の形態そのままで残されていました。おそらく世界唯一でしょう。（個別資料報告、目録：『紀要』第1、3号ほか）

稀代のチェロ奏者が遺した「ホルマン文庫」楽譜約1000点は音楽家のレパートリーや足跡、有名作曲家との交友をトータルで知りうる貴重な資料群です。そのうち自作品について解説目録を作成しました。（個別資料報告、目録：『紀要』第2号ほか）

音楽学者フリートレンダーからの受贈資料について、はじめてまとまった紹介と目録を作成しました。（目録と紹介：『紀要』第5号）

カミングス文庫の現在

個別資料、カミングスについて精査した論文を、また目録を各部分ごとに作製し、世界の関心に対応しつづけています。（『紀要』第1～7号）

手沢本から見えてくるもの

所蔵資料には署名や献辞、もとの所蔵者の書き込みなどが多数のこり、蔵書票などが貼られている例も多数あります。そこから、来歴や旧蔵者の思い、理解が明るみにでます。楽譜では、旧蔵者と作曲家との交友が偲ばれます。徳川頼貞の署名本から、彼の蒐集歴や熱意が伝わってきます。

南葵音楽図書館とは

先駆的な専門図書館の姿が、所蔵資料や図書カードなどの関連資料を併せ調査し、明らかになってきました。頼貞に協力した音楽学者、関係者が抱いた理想と活動、分類の方法、短期間に蒐集した資料群の精髄を紹介できました。南葵音楽文庫閲覧室には、その時代の収蔵資料が書棚を埋めています。（『紀要』第1～7号、『南葵文華』第5号）

日本の洋楽演奏を支えて

所蔵していた楽譜が、日本の西洋音楽演奏に用いられていたと判明しました。R・シュトラウス《アルプス交響曲》は、頼貞が日本初演のために貸し出したと書いていますが、アメリカ初演、ニューヨーク初演でも使われた楽譜でした。展示公開もしたベートーヴェンの「第九」日本人による初演使用楽譜からは、往時の演奏者たちの苦労も伝わってきます。板東俘虜収容所でドイツ人が使用した楽譜も見つかりました。日本唯一の所蔵です。（『紀要』第1～7号、『南葵文華』第5号）

徳川頼貞：新たな人物像

調査研究が進むにつれ、徳川頼貞の尽力、行動、事績もさらに明らかになりました。それは従来からのイメージを見直し、新たな人物像を提示する必要を生んでいます。（『紀要』第3、5～7号、『南葵文華』第7号、喜多村進『徳川頼貞侯の横顔』、徳川頼貞『薔庭楽話』）

『南葵音楽文庫案内』

紀伊徳川家の文化貢献、徳川頼倫と南葵文庫をふまえ、頼貞と南葵音楽図書館、その伝承と現在の南葵音楽文庫を包括的に紹介する出版が実現しました。

ひろがる輪、これから

7年間に多くのとり組みがあり、単行本をふくめ1400ページ余りの印刷物を世に送り出しました。200回近いレクチャーを開催してもいます。関連した「南葵音楽文庫コンサート」が開催され、地域の「南葵音楽文庫サポーター」による演奏や展示、学習活動も生まれ、続いています。

南葵音楽文庫【資料展示】開催中

南葵音楽文庫閲覧室内および入口前展示ケースで、関連資料の展示をおこなっています。
常設展示のほか、企画展示を随時おこないます。

「第九」初演100年 関係資料特別公開

徳川頼貞が準備し日本初演で使用された楽譜、作曲者の指示前に刷られた初版初刷スコア、当日のプログラムなど南葵音楽文庫が所蔵する貴重・稀少資料を展示。
大半が初公開です。

企画展の予定:2024.11.2～12.26
（最終日は15時終了）

南葵音楽文庫　和歌山公開までの略年表

◆頼貞の時代に

1902(明治35)年　4月　徳川頼倫(1872～1925）が設立した南葵文庫が東京麻布の徳川邸内に開館
1913(大正2)年　9月　徳川頼貞（1892～1954）英国留学へ出発。音楽書、楽譜を購入。15年12月帰国
1917(大正6)年　8月　カミングス蒐集の資料購入。同年、南葵文庫音楽部門による蒐集本格化
1918(大正7)年　10月　南葵楽堂が南葵文庫に隣接し開館　音楽会始まる　半地下に音楽資料を配架
1920(大正9)年　10月　楽譜、音楽書閲覧開始　カミングス文庫公開
1923(大正12)年　9月　関東大震災により南葵楽堂損壊。
1924(大正13)年　7月　音楽資料等のぞき南葵文庫を東京帝国大学に寄贈
1924(大正13)年　10月　南葵楽堂図書部開設　旧南葵文庫事務所にて公開
1925(大正14)年　10月　南葵音楽事業部設立　付属の南葵音楽図書館開設
1927(昭和2)年　3月　南葵音楽図書館が「ベートーヴェン百年忌記念会」展示を開催
1927(昭和2)年　M.フリートレンダー蔵書の一部を受贈　ベルリンで貴重書購入
1928(昭和3)年　喜多村進が掌書長に就任　この頃、J.ホルマン旧蔵楽譜受け入れ
1932(昭和7)年　11月　南葵音楽図書館閉館
33年4月～45年6月寄託先の慶應義塾図書館で公開

讃賞の聲裡に
南葵文庫記念館の開館式

▲南葵楽堂の開館を伝える記事
(東京日日新聞/1918.10.27)

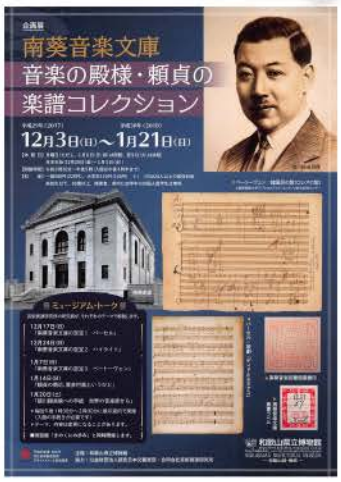
◆仮公開　1967～1977

1967(昭和42)年 3･4月　「特別公開 南葵音楽文庫」展
読売新聞社主催により東京と大阪で開催
1970(昭和45)年　5月　東京駒場の近代文学館で南葵音楽文庫　仮公開開始
（財）東京音楽センター設立　資料整理、新規の資料
蒐集開始、目録の刊行、貴重資料のﾏｲｸﾛﾌｨﾙﾑ作成
同財団解散　仮公開終了
1977(昭和52)年　7月　所蔵資料は（財）読売日本交響楽団基本財産に
新規の収蔵資料は東京音楽大学
1977(昭和52)年　9月　（1992～国立音楽大学）に寄託

▲南葵音楽文庫特別公開　開会式
(1967)

◆公開への足跡　1999～2017

1999(平成11)年　11月　各寄託先から財団法人読売日本交響楽団（以下読響）に返還
その後清澄の読売江東ビル内に空調設備を整えた保管室3室を整備し収蔵
2006(平成18)年　6月　読響と慶應大DMCが貴重資料（手稿部分）のデジタル化で合意　8月から撮影開始
2009(平成21)年　10月　資料画像閲覧サイト「デジタル南葵楽堂」公開
2012(平成24)年　6月　読響がデジタル化事業を継承しスキャン作業開始　録音、映像、演奏会等開催
2013(平成25)年　6月　IAML例会「南葵音楽文庫貴重資料デジタル化：現状と公開に向けて」（美山良夫）
2014(平成26)年　7月　貴重資料目録掲載写本部分のデジタル化完了
2015(平成27)年　3月　和歌山県関係者が読売江東ビルを訪問、南葵音楽文庫を視察
同年、読響が貴重資料の修復に着手。Conservation for Identity社（埼玉県）に委託
11月　IAML例会「音楽専門図書館の先駆　南葵音楽図書館の成立と展開」（林淑姫）
2016(平成28)年　6月　和歌山県が一般会計補正予算に南葵音楽文庫関係計上し県議会で可決
和歌山県立図書館、南葵音楽文庫受け入れのための改修工事実施
8月　読響と和歌山県との間で寄託契約成立、12月2日調印
11月　燻蒸をおえた資料が和歌山県立図書館に到着
2017(平成29)年　4月　和歌山県立図書館、同博物館において研究員による調査始まる
2017(平成29)年　12月　南葵音楽文庫公開開始①、記念演奏会②、講座開始
和歌山県立博物館で企画展開催③



講座開催のお知らせ

問い合わせ先:
[TEL]073-436-9520(和歌山県立図書館)

南葵音楽文庫アカデミー 春

2025年 2月22日(土) 13:30〜15:30

和歌山県立情報交流センター Big・U(田辺市) 研修室1
美山良夫(慶應義塾大学名誉教授)
「南葵音楽文庫」100年 今、その扉をひらく
近藤秀樹(大阪教育大学講師)
1921年5月 巴里の頼貞

2月23日(日) 13:30〜15:30

和歌山県立図書館(本館)2階 講義・研修室
佐々木勉(元名古屋音楽大学教授)・林淑姫(旧日本近代音楽館主任司書)
美山良夫(慶應義塾大学名誉教授)
南葵音楽図書館の軌跡②
カミングス文庫 歴史と現在

南葵徳川音楽塾

和歌山県立図書館(本館)
1階 南葵音楽文庫閲覧室
11:00〜12:00

2025年 2月23日(日)

白石朝子(愛知淑徳大学 文学部 准教授) 進行:近藤秀樹
ジル=マルシェックス×南葵音楽文庫
〜初来日100周年の年に

2月24日(休)

近藤秀樹(大阪教育大学講師)
フランス音楽への扉
〜頼貞の絵葉書から

▲ジル=マルシェックス

閲覧室で聴講(15名程度)【事前申込不要】
南葵音楽文庫 閲覧室前で申込票に記入頂きます。

オンライン聴講(Teams配信)【事前申込要】
＊申込フォームは右記QRコードまたは和歌山県立図書館「南葵音楽文庫」ウェブサイトからアクセスしてください。
https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/jyuku/
折り返し、聴講のためのIDとパスコードをお送りします。

＊各日それぞれ別々にお申し込みください。
(IDとパスコードは2日間共通ではありません)。
＊接続人数に制限があります。
＊アーカイブ配信はありません。

事前申込要(定員60名・先着順)
聴講は以下の要領でお申し込みください。

《メールでのお申込み》
題名に「南葵音楽文庫アカデミー参加希望」と書き、
①参加希望日
②参加者氏名
③連絡先電話番号
を本文中に明記のうえ、
event@lib.wakayama-c.ed.jp
までご送信ください。
※返信メールが受信できるよう設定して下さい。

《来館/FAX/往復ハガキでのお申し込み》
上記の①〜③に加え、
④参加者の郵便番号、住所、
⑤メールアドレス(任意)
を記入し、ご来館または下記までご送付ください。
[FAX]073-436-9511(和歌山県立図書館)
[郵送]〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38
和歌山県立図書館サービス課 宛

★各回ごとに定員になり次第受付を締め切ります。
★申込後に参加ができなくなった場合は、直ちにその旨ご連絡ねがいます。

※詳細は別紙チラシあるいは右記Website をご覧ください。
https://www.lib.wakayama-c.ed.jp/nanki/event/academy/

講座を開催しました

南葵徳川音楽塾

2024年 9月15日(日)
美山良夫(慶應義塾大学名誉教授)
「第九」初演100年
関係資料特別公開プレビュー

9月16日(祝)
泉 健(和歌山大学名誉教授)
田中正平と南葵音楽文庫

南葵音楽文庫アカデミー 秋

2024年 9月14日(土) 13:30〜15:30

橋本市教育文化会館 3階 視聴覚室
美山良夫(慶應義塾大学名誉教授)
「南葵音楽文庫」100年 今、その扉をひらく
佐々木勉(元名古屋音楽大学教授)
G.F.テンドゥッチの足跡を訪ねて

9月15日(日) 13:30〜15:30

和歌山県立図書館(本館)2階 講義・研修室
近藤秀樹(大阪教育大学講師)・林淑姫(旧日本近代音楽館主任司書)
南葵音楽図書館の軌跡①
同時代音楽へのまなざし フランスとロシア
── 南葵音楽図書館の楽譜蔵書から

南葵文華第11号
令和6年12月28日発行

発行所
和歌山県立図書館
〒641-0051 和歌山市西高松1-7-38

編集
合同会社芸術資源研究所
〒600-8439 京都市下京区坂東屋町261-2-1001

編集協力
有限会社ティアンドティ・デザインラボ
〒649-2326 和歌山県西牟婁郡白浜町椿36